

# 絵本の翻訳に何が影響しているか ～日英の絵本を通して～

古市 久子  
西崎 有多子

## 目次

- I 動機と目的
  - II 方法
  - III 翻訳本における違いについて
  - IV 絵本の翻訳に何が影響しているか
    - 1. 絵本の心を伝える手法として
    - 2. 声の文化として
- まとめ

## I 動機と目的

絵本はどの国の子どもも大好きである。筆者は英語圏で暮らしていた時に絵本を子どもに読んで聞かせた。その時読んだ『ブレーメンの音楽隊』で、4匹の動物が力を合わせて泥棒を追い払う話を読んだ。それは、犬、ろば、にわとり、ねこの泣き声をあわせると、「お前を殺して食べちゃうぞー」ということばになっていた。もちろん日本語の訳本ではこのように訳することはできない。「ろばはひんひん、いぬはわんわん、ねこはにゃあにゃあ、おんどりはこけこっこう」となっていた。このことに出会ってから、翻訳本のもつ国の文化差は何なのかが気になっていた。翻訳はどのような要因が影響してくるのか、興味を持ち続けたことが、本研究において検討するに至った理由である。

絵本について書かれたものは多い。それらは絵本に関するエッセイのようなもの（長田

1998・江國1990・赤羽2005など）、絵本に関わる諸要因についてかかれたもの（藤本1999&2007・後路2005など）、子どもと絵本の関係についてかかれたもの（ワトソン&スタイル2002・谷本2002など）、比較文化論的なもの（松居2007・原1991など）、また、五味など絵本作家が自分の創作経験から絵本論を展開している。しかし、それは研究的視点と言うよりはあくまで、作家個人の感じた絵本論である。それらは作家または絵本に造詣の深い人のものであって、非常に深い意味を持っているが、個々人の視点で書かれており、数多くの絵本全体についての視点ではない。また、翻訳、特に絵本についてのものは、そういった著書の中にごくわずか触れられているにすぎない。また、1998年に『季刊ばるる』が特集を組んでいるが、これも、対談や個人の体験による貴重な談である。翻訳の研究ではオノマトペの視点での研究は多い（楳垣1961・皆島2004など）が、一つの焦点化された視点から見ている。

そこで、絵本を実際に読んで、そこに見られる翻訳に影響を与える要因を調べることによって、そういった作家の感性で書かれた絵本の様子について、資料を通して、より一般的な法則を見出したいと考えた。

翻訳というと、訳者が誰であるかに影響を受

けると考えるのが一般的であろう。しかし、絵本については特別なものに限り、複数の訳者がいることはありえない。一人の訳者の本がその国の子どもたちに絵本を紹介する。したがって、訳者において絵本のイメージは変わるのではないかという議論はあっても、訳者が一冊の本について多く出現することは、有名な本でもない限り、その事実は少ないのである。もちろん、翻訳者は原作者と同様、それ以上の細心の配慮をしていることは、『季刊ぱるる』の特集版、「翻訳って何？」で、多くの翻訳者が語っている [1]。今回は翻訳者自身の作風を超えて、絵本の翻訳がされる上で、何が影響してくるのかを、日英の絵本を通して考察したい。

## II 方法

この研究に使用した絵本は合計128冊である。英語版と、全く同じ作家の同じ絵を使用した日本語版を64組で、末尾にそのリストを掲載している。筆者らは英語版と日本語版の同一絵本の原本と訳本を読み、その対訳を通して、記述や絵など、原作と違う箇所を取り出して調査資料とした。その違いが何から来るものかについて、違いを文章化したリストを作り、“読み取り分析”を行った。“読み取り分析”とは筆者らの造語である。ストーリー分析に使われるカテゴリ分析をもう少し広義に理解し要因を取り出すという意味である。本研究は翻訳に影響する要因について探る第一歩のものである。したがって、詳細な仮説は設定していない。しかし、多くの絵本論者が言う翻訳に関する個人的感性に全面委ねることなく、できるだけニュートラルにその要因を引き出して第一次の研究とすることにした。

## III 翻訳本における違いについて

翻訳に影響する要因は16項目見出すことがで

表1 翻訳に影響する要因 単位冊

1	絵本名の変更・副題の挿入	24
2	生活習慣による違い	15
3	オノマトペの使用が多い日本語	13
4	人名・地名の変更	10
5	状況説明の加筆	8
6	言葉のリズムを合わせた	6
7	製本の方法	3
8	時代の差	3
9	文字の違い	3
10	一つの単語が多様な言い回しになる	2
11	対話形式か、語り口か	2
12	遊びの名前の変更	2
13	スペース上の省略	2
14	意味をよく伝えるために表紙の絵の変更	2
15	道徳的な意味合いの強調	1
16	死に対する考え方の影響	1
17	絵も文章もほぼ一致	9

(本研究対象本64組中)

きた。それらは表1に示す通りである。本研究の対象にした絵本65組の中で、最も多かったのが、「1. 絵本名の変更・副題の挿入」で、本の内容をよりよく伝えようとする意図が感じられるものであった。次に多かったのは「2. 生活習慣による違い」で、変えざるを得ないものと思われる。「3. オノマトペの使用が多い日本語」がきているが、日本語のオノマトペは従来多くの研究者が対象にしているものである。次に多いのは「4. 人名・地名の変更」で子どもの名前の呼び方等をその国に合わせるものである。さらに、「5. 状況説明の加筆」と続くが、それはその国の人でなければ知りえないような内容について説明している。次いで「言葉のリズムを合わせた」、「製本の方法」、「時代の差」、「文字の違い」と続く。遊びそのものの違いから似た遊びに変えて記述したもの、国の習慣の違いから変わるもの、「道徳的な意味合いの強調」、「対話形式か、語り口か」、「死に対する考え方の影響」などがある。数は少ないが、「一つの

単語が多様な言い回しになる」があり、日本語と英語の違いを見るものである。また、色や絵に関する違いは本全体の色の違いに加えて「意味をよく伝えるために表紙の絵の変更」があった。64組の中で14%の9冊が内容も絵も同じであった。各要因については次に説明をする。

表2 「絵本の変更・副題の挿入」に該当する翻訳絵本（64組の内、24組）

変更点	番号	日本語の絵本名	英語の絵本名
A. 題を変える		あなほほるものおっこちるところ	A Hole Is to Dig
		いもうとのにゆういん	Anna's Special Present
		うさぎさんてつだってほしいの	Mr. Rabbit and the Lovely Present
		海辺のあさ	One Morning in Maine
		おおきな木	The Giving Tree
		ぐるんぱのようちえん	The Happiest Elephant
		しろいうさぎとくろいうさぎ	The Rabbits' Wedding
		ぞうくんのさんぼ	Elephant Blue
		ちいさいあなたへ	Someday
		とんことり	Anna's Secret Present
B. 形容詞的なことばを加える		ピカくんめをまわす	Pekka says go!
		げんきなマドレーヌ	Madeline
		オラたちのたけやぶ	The Bamboo Grove
		ひとまねこざるときいろいぼうし	Curious George
		かばくん	Wake Up, Hippo!
C. 副題を加える		ふしぎなたけのこ	Taro and the amazing bamboo shoot
		あいうえおのき ちからをあわせたもじたちのはなし	The Alphabet Tree
		じぶんだけのいろ いろいろさがしたカメレオンのはなし	A Color of His Own
		ALDO わたしだけのひみつのともだち	ALDO
D. 主人公の名前の有無		ルピナスさん 小さなおばあさんのお話	Miss Lamphius
		ふたりはいつも	Frog and Toad All Year
		ふたりはいっしょ	Frog and Toad Together
		ふたりはともだち	Frog and Toad Friends
	ふたりはきょうも	Days with Frog and Toad	

## 1. 絵本名の変更・副題の挿入

絵本名を変更したり、副題を挿入している絵本は表2の通りで全体の38%ある。それらはA. 題を変える ～ と、B. 形容詞的なことばをつける ～ 、C. 副題を加える ～ 、D. 主人公の名前の有無 ～ の4つに分類される。絵本名の変更は、その国の言い回しによるものでは、『あなはほるものおっこちるもの』というのがある。『The Rabbits' Wedding』が『しろいうさぎとくろいうさぎ』に、『Someday』が『ちいさいあなたへ』に、『The Giving Tree』が『おおきな木』に、『とんことり』が『Anna's Secret Present』など11冊の絵本に見ることができた。たいていの変更は国の習慣に従って理解度を深めるために工夫されている。特に、形容詞的なことばや動詞をつける場合は、本の主人公を通して全体のイメージがわかる。『げんきなマドレーヌ』、『オラたちのたけやぶ』、『ひとまねこざるときいろいぼうし』、『Wake Up, Hippo!』、『Taro and the amazing bamboo shoot』などである。

C. 副題をつけたものは、『あいうえおのきーちからをあわせたもじたちのはなし』、『じぶんだけのいろーいろいろさがしたカメレオンのはなし』、『ALDOーわたしだけのひみつのともだち』、『ルピナスさんー小さなおばあさんのお話』で、副題が何のお話を説明している。主人公の名前がある英語の原本が、日本語ではなくなっているのは、なじみがないものを判りやすく変えたもので『海辺のあさ』や、アーノルド・ローベルのシリーズ『ふたりはいつも』、『ふたりはいつしょ』、『ふたりはともだち』、『ふたりはきょうも』で見られる。題を変えたり副題をつけるのは今回の調査では最も多かったが、訳者の工夫が結果として、題に表れたものと思われる。

## 2. 生活習慣の違い

『あおくんときいろちゃん』と『little blue and little yellow』では生活習慣の違いを意識して変えている部分がある。19・20頁の「Happily they hugged each other and hugged each other.」、34頁「They hugged and kissed him.」、38頁「They all hugged each other with joy.」が 19・20頁の「よかったね あおくんときいろちゃんは うれしくて もううれしくて うれしくて」、34頁「しっかりとだきあげた」、38頁「おやたちもうれしくてやっぱりみどりになりました」と訳されている。日本の習慣ではハグするということが一般的でないために、「うれしくてうれしくて」と変えられたものであろう。

『うさぎさんてつだってほしいの』と『Mr. Rabbit and the Lovely Present』でも、同じことが見られた。8・14・18・24頁「She likes bird in trees.」、最後の頁「a happy birthday and a happy basket of fruit to your mother」が、8・14・18・24頁「おかあさんは、とりはそのときでうれしそうにうたっているのがすきな」、最後の頁「すてきなプレゼントをもらって、ほんとうによかったね」というように、訳を変えてわかりやすくしている。たぶん日本では鳥はカゴで飼う家が多いからであろうか。日本語は具体的なものを省略している。

## 3. オノマトペの使用が多い日本語訳

日本語におけるオノマトペの定義について、日本語の辞書をまとめてみると、おおよそ次の3つに大別できる。(広辞苑・大辞林・国語辞典など)。オノマトペとは擬音語・擬声語・擬態語を包括的という語で、擬音語は実際の音をまねて言葉とした語。「さらさら」「ざあざあ」などである。擬声語は事物の音や人・動物の声

などを表す語。「きゃあきゃあ」「わんわん」の類を言う。擬態語は物事の状態や様子などを感覚的に音声化して表現する語で「にやにや」「てきぱき」などがこれに入る。英語との比較について九頭見は多くの文章をあげて、必ずしも日本語のオノマトペが英語においてもオノマトペによって表現されているとは限らないことを示した [2]。

今回の調査においてオノマトペが使用されていた絵本は20%ある。該当する絵本は、『ロージーのおさんぼ』、『チキンスープ・ライスいり』、『ぐるんぱのようちえん』、『ふたりはいつも』、『ふたりはきょうも』、『かばくん』、『ボルカ』、『キャット・イン・ザ・ハット』、『すてきな三にんぐみ』、『ちいさいおうち』、『月夜のみ

みずく』、『だいくとおにろく』、『くまさんくまさんなにみてるの?』の13冊である。その中の2冊を表3に例として挙げる。『ロージーのおさんぼ』と『Rosie's Walk』では3つの動詞と2つの助詞が日本語ではオノマトペに変わっている。

『チキンスープ・ライスいり』と『Chicken Soup With Rice』では動詞が日本語ではオノマトペに変わっている。英語はオノマトペでなく韻を踏むことによって、音遊びとしての要素が入っている。日本語には、このお話の状況に対応するぴったりのオノマトペがふんだんに取り入れられ、それらによってリズムカルな要素が加わり、子どもにとって十分響くものにするという意図が感じられる。リズムも十分生かされ

表3 日本語の絵本に多く見られるオノマトペの例（下線は筆者が付ける）

絵本名	頁	日本語の絵本	英語の絵本
『ロージーのおさんぼ』と『Rosie's Walk』	5	おにわを <u>すた</u> こら	across the yard
	9	おいけのまわりを <u>ぐる</u> り	around the pond
	16	こなひきごやのまえを <u>すた</u> すた	past the mill
	21	へいのすきまを <u>す</u> るり	through the fence
	25	はちのすばこのしたを <u>すい</u> すい	under the beehives
『チキンスープ・ライスいり』と『Chicken Soup With Rice』	6	1 <u>くち</u> スス 2 <u>くち</u> スス すすって すべる、チキンスープ・ライスいり	Sipping once sipping twice sipping chicken soup with rice
	10	1 <u>かい</u> ふふう 2 <u>かい</u> ふふう ふふうと かぜがふく、チキンスープ・ライスいり	Blowing once blowing twice blowing chicken soup with rice.
	20	1 <u>かい</u> ぐつぐつ 2 <u>かい</u> ぐつぐつ <u>ぐ</u> つぐつと による、チキンスープ・ライスいり	Cooking once cooking twice cooking chicken soup with rice.
	22	1 <u>かき</u> すーい 2 <u>かき</u> すーい かいてすすもう、 チキンスープ・ライスいり	Paddle once paddle twice paddle chicken soup with rice.
	24	1 <u>かい</u> ほ、ほ、ほーう 2 <u>かい</u> ほ、ほ、ほーう こわいこえてよるこぶぞ、チキンスープ ・ライスいり	Whoopy once whoopy twice whoopy chicken soup with rice.
26	1 <u>かい</u> ぷーつ 2 <u>かい</u> ぷーつ <u>ぷー</u> つぷーつと ふきあげる、チキンスープ・ライスいり	Spouting once spouting twice spouting chicken soup with rice.	

ている訳になっている、絵本では珍しい例である。

#### 4. 人名・地名の変更

##### (1) 人名の変更

本調査では10冊の絵本に見られたものの中で、人名を変えたものが7件あった。『そらいろのたね』と『The Blue Seed』、『ボルカ』と『Borka』、『いもうとのにゆういん』と『Anna's Secret Present』、『とんことり』と『Anna's Special Present』、『ともだち』と『Friend』、『ふしぎなたけのこ』、『Taro and the amazing bamboo shoot』、『ルピナスさん』と『Miss Lamphius』である。

そのうちの3冊は日本語の子どもの名前であるが、『そらいろのたね』ではゆうじ、はなこ、しげる、ひろし、くみこがBen、Suzy、Mike、Mary、Nedになり、『いもうとのにゆういん』では、あさえ、ひろちゃん、ほっぺこちゃん、あやちゃんが、Anna、Susie、Emily、Katyのように英語風に変えられている。しかし、日本の代表的名前である太郎はそのまま英語の訳に使われている。しかし、英語の絵本が日本語に訳されているものは、『どろんこハリー』、『ピーターのいす』、『くまのコールテンくん』、『しりたがりやのジョージ』、『海辺のあさ』のジェイン、『おやすみなさいフランシス』、『げんきなマドレーヌ』、『葉っぱのフレディ』、『スイミー』、『フレデリック』とそのままが多く、洋風文化の取り入れは柔軟に行われていることが名前をそのまま使用することに表れているのではないと思われる。

このうち、『ともだち』と『Friend』は原作がドイツ語で書かれており、日英それぞれに特徴が見られる。日本語はドイツ語を元に、おんどりのフランツ、ネズミのジョニー、ぶたのヴァンテールと訳しているが、英語は自国風に、

Charlie Rooster、Jonny Mouse、Fat Percy としている。これは原作に忠実な日本語訳に対して、英語版では英語風に変えたと思われる。

英語では同じ名前を、自国の言い方で変えている場合が多い。それは、フランス語読み、ドイツ語読みというように読み替えてきた長い歴史があって、言葉に合わせて読み替えるのが当たり前で、いわば自動的に読み替える文化が生きているのである。

残りの3冊は名前の有無によってわかりやすくするものである。本のイメージを前面に出す意味であろうか、『ルピナスさん』と『Miss Lamphius』では、ルピナスを植えることが中心になっている主人公の行動をタイトルにしているのが日本語訳である。Taroという名前を入れることで、わかりやすくしたのが、『Taro and the amazing bamboo shoot』であり、名前をなくすることで、混乱を避けたのが『なかよしむら』である。

理解不明なものは『ボルカ』と『BOLKA』において、ガチョウの夫婦の名前が英語版ではMr. and Mrs. Plumpster になっているのが、ポッターピオン夫婦と訳されていることである。plumpが丸々としたという意味であることから、一部に日本語のポッターを充てたとも考えられるのだが現時点では不明である。

##### (2) 地名の有無

地名を意識的に入れたりなくしたりしているものがある。地域の名前はそのものが大きなイメージをもつ。本調査64組のうち3冊に見られた。例えば『なかよしむら』と『The Village Where Everyone Is Happy』では、日本人にとって馴染みのない土地の名前であるタイのJaminogolの名前が日本版では消えている。『海べのあさ』と『One Morning in Maine 1952』の原文では米国北東部大西洋の州であ

るMaineという地名が入っている。しかし、日本語はMaineという地名が『海べ』に変っている。日本ではメインという土地の雰囲気伝わらず、話の展開上、海辺にあることが重要であることから、都市の名前をなくして、海べという言葉を入れたものと思われる。反対に『ぴかくんめをまわす』と『Pekka says go!』の3頁では「大きなビルディングのたちならぶだいかいは」というところで、英語の訳本では3頁「This is Tokyo, one of the biggest cities in the world.」と「東京」という地名を入れることで、具体的に大きな都市だとわからせている。

## 5. 状況説明の多い訳本

### 英語の説明が多い

日本語版においても、英語版においても他国の文化にないものをどのように伝えるか、訳者は色々と工夫を試みている。その一つに、状況や事物の説明を多く入れる手法を用いて、反対に、自分たちの文化にないものは省略するということがある。

『だいくとおにろく』と『Oniroku and the Carpenter』は日本の昔話である文化の違いだけでなく、その国の歴史も含んでいる。原作の

5～6・7～8頁の：「むらのひとたちは、とんとこまりはてていた」を絵に合わせて次の頁に移動させ、その理由を加えている。英語の7～8頁では「The people of one village on its shores became very unhappy. Without a bridge, they could not cross the river and go to market. They could not visit their friends on the other side.」「The river was wide and wild, its current fierce.」のように、文章の量も多い。また、16～17頁の「さあめだまよこせ」という理由を英訳では告げている。その英語の文は次のとおりである。「“I have built your bridge” he bellowed.」さらに、20～21頁では日本語にはない説明が入る。「ONIROKU」the carpenter said out loud to the tree. “Play come to me soon with Oniroku. That must be the orgre’s name.”

『ふしぎなたけのこ』と『Taro and the Amazing Bamboo Shoot』の2例を表4・5に示す。こちらは、原作の複雑な情景描写をはずして、単純な訳にしている例である。たけのこがどご馳走であることも、さかなや昆布が食料であることも、英語圏の子どもにはわかりにくいと考えたためであろう。

表4 『だいくとおにろく』と『Oniroku and the Carpenter』の翻訳例

頁	日本語の原作	英語の翻訳本
5	なし	The people of one village on its shores became very unhappy. Without a bridge, they could not cross the river and go to market. They could not visit their friends on the other side.
15	なし	It was the most beautiful and the strongest bridge.
	なし	he had ever seen.
17	なし	“I have built your bridge,” he bellowed.
	なし	“I did not promise to give you my eyes,” the poor carpenter said in a small, scared voice.
	なし	“Is there nothing I can give you instead?”

頁	日本語の原作	英語の翻訳本
17	なし	or...I will come for your eyes.
19	なし	The carpenter did not know how to learn the orge's name.
20	なし	"ONIROKU!" the carpenter said out loud to the trees. "Pray come to me soon with Oniroku. That must be the orge's name."
	なし	soundly for the first time since he had stood by the river's edge. The grin vanished from the orge's face and furious,

①『とん ことり』と『Anna's Secret Friend』

日本語の原本では図1-1のように一行「かなえはやまのみえるまちにひっこしてきました」が英語版では図1-2のように非常に多くの説明が加えられている。その文章は次のようである。「Anna was excited about moving to a new house in a new town. She was especially pleased to be living close to the mountains. But already she was missing the friends she had left behind. Still, there was hardly time to think about anything because there were so many boxes to be carried into the new house.」

But already she was missing the friends she had left behind. Still, there was hardly time to think about anything because there were so many boxes to be carried into the new house.」引越しに対する子どもの気持ちを解する部分が詳しく説明されているのは、日本の引越しということの意味する内容を伝える必要があったからである。



図1-1 日本語の原本『とん ことり』2・3頁引用



図1-2 英語の訳本『Anna's Secret Friend』2・3頁引用

② 『ふしぎなたけのこ』と『Taro and the Amazing Bamboo Shoot』

表5 『ふしぎなたけのこ』と『Taro and the Amazing Bamboo Shoot』

頁	ふしぎなたけのこ	Taro and the Amazing Bamboo Shoot	備考
2	「たけのこはみんなのおごちそうだ。やまのおくのおくのむらには、さかなもこんぶもない」が英語訳にはない。	Then one spring morning Taro's mother said to him. が説明に加えられている。	お話の背景を説明する必要がある箇所を多く付け加えている。
7	「たけのこはのびるのにあきた。そして、たけのこになることにきめた。はっぱをだすまえにひとやすみすることにきめた」の部分が変えられている。	The tip swayed gently in the breeze. になっている。	たけのこの生態を知らない子どもへの配慮か。
20	「くえるとも、くえるとも。うまいぞう」とうさんがいった。「たけのこよりうまいか？」たろがきいた。「たけのこもうまい。こんぶももつとうまい。さかなも、もつともつとうまい。それに、おまえ、こんぶやさかなやかいは、からだにいいんだ」かあさんがいった。	“Let us catch some and find out.” said Taro's father and uncles. に変わっている。	貧しい村の様子を基にした言葉のやり取りは難しいと判断して、米人らしく行動的な言葉に変わっている。

③ 『ちいさいおうち』と『The Little House』  
『ちいさいおうち』と『The Little House』では日本語訳で次の言葉が一頁全体に挿入されている。原本にないものを加えている22頁は「そのうち、ちいさい おうちの まえを いたり きたり しはじめました。でんしゃはいちにちじゅう、そして よるになってからも、まだ いたり きたり しました。すると まちの ひとたちまで、とても いそがしそう

に、とても おおいそぎで かけまわるようになりまして。」がその内容である。原本が出版されたアメリカでは絵だけで理解できるような都市発展の時代であった。しかし、日本ではまだそこまでの発展を子どもがすぐに理解できるほどは進展していず、絵だけでは理解できないであろうと考えたためではないだろうか。図2-1は文のない英語の原本であり、図2-2は文章の加えられた日本語版の訳本である。文化の進展

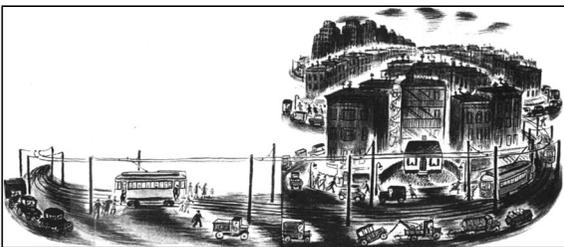


図2-1 英語の原本『The little house』  
22・23頁引用

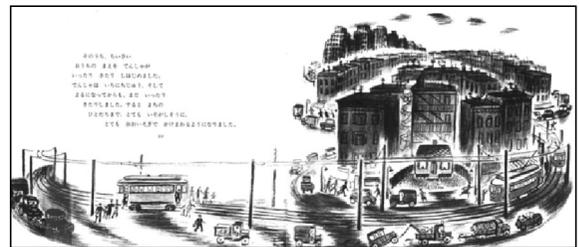


図2-2 日本語の訳本『ちいさいおうち』  
22・23頁引用

によってどんどん街が都市化していくことはアメリカに送れて日本でもはじまった。このことを訳者は日本の子どもに考えさせたかっさに違いない。

#### ④ 『いもうとのにゆういん』と『Anna's Special Present』

『いもうとのにゆういん』と『Anna's Special Present』では日本版ではない表記が次の箇所です。英語版に入っている。6頁：Anna and Susie played at being doctors looking after Emily. : She looked very worried. : but they will sew it up as good as new. They are very good doctors, so there's no need to worry. 8頁：When will she be back? Anna asked. "She may be in the hospital for several days, but you can go and see her. . . Mrs Thomas across the corridor will keep an eye on you until Daddy get back. 11頁：Anna and Susie played with Emily some more. : the wind blew through the windows. 12頁：It was so warm that soon she fell asleep. 14頁：Let's go and have something to eat. 17頁：Anna set three places at the table. "One for Daddy, one for Emily and one for me." 18頁：Anna's father slept in Katy's bed that night. Anna woke up very early the next morning. これらの文章はアメリカと日本における医療事情が違いため、細かいところで説明を要したのであろう。

#### 6. 言葉のリズムを合わせた

言葉のリズムを大切に詩的な本として『よあけ』と『Dawn』をあげる。『よあけ』は中国の柳宗元の詩、漁翁一老人の魚釣りという死を元にして作った絵本と裏表紙のあとがき

にある。詩の前半分の山と湖が緑になるところまでが絵本に書かれているが、ポーランド系の作者、シュルヴィッツは子どもを一人加え、竹を燃やす場面はカットしている違いはあるものの、古い詩の世界と新しい絵の世界に共通しているのは色を通してみるという認識であるという[3]。日本語訳では、「山がくろぐろとしずもる、しだいにぼやっともやがこもる、おーるのおと・しぶき・みおをひいて」など、いかにも詩的な訳に徹しており、The mountain stands guard, dark and silent / Slowly, lazy, vapors start to rise. The oars scream and rattle, churning pools of foam. の原著に忠実なことばより、詩のもつ言葉を重要視している。

#### 7. 製本の方法

『パパ、お月さまとって!』と『Papa, please get the moon for me』ではお月様のところにパパが行きついたところで、満月をたたみ込んだ折り方が違う。元の本がシンプルな四つ折りであるのに比して、翻訳の方が高度な技術を用いている。この件については出版元の偕成社の編集部で電話で問い合わせた。その結果、アメリカで発行された当時は紙質がよくなく、複雑な折り方は出来なかったとのこと。しかし、現在は日本と同じように英語版も複雑な折方をしている。エリック・カールは1980年代に絵本を改定している。それを機に、折り方を変えたというものである。今回我々が目にした原本は1986年版であった。

『すてきな三にんぐみ』と『The Three Robbers』では6～7頁の絵が全く反対を向いている。これは印刷のミスであろうか、それとも効果を狙ったものであろうか。(図3-1と図3-2は5・6頁から引用)これについては出版した偕成社に確かめると、絵本は左から右へ進んでいく。原本では泥棒が反対の方向に向かっ



表6 文字の違いが絵本の文章を変えた例

絵本名	日本語の訳本	英語の原作
『おやすみなさい フランシス』と 『Bedtime for Frances』	あは アップルパイ いは たち うは うみへびよ・・・ えは えんとつだよ おは おだんご ては てっぼう、ズドン に続く。 (とらを引き出すための「て」と「と」)  か～そ10個の文字	←A is for apple ←B is for bear ←C is for crocodile・・・ ←D is for dumplings ←S is for sailboat. に続く。  U is for underwear, down in the drier...” Frances stopped because “drier” did not sound like “tiger”. E～Rの14文字

では26文字の英語を訳した日本語の訳本は、本の文字は全て日本語の50音文字になっている。特に、最後の2ページ目と最後のページの文字の現れ方が、左から書く英語と日本語の違いを表している。図4-1と図4-2はその違いの部分を示している。これは絵に見られる違いであるが、文章の違いもある。

『おやすみなさいフランシス』と『Bedtime for Frances』ではABCDEが「あいうえお」になっている。「お」はおだんご、が入っている。あの時は「あ」で始まるアップルパイという風に、言葉が合うように、登場する字を変えている。そして、次へのことば「くま」につづかせ、辻褄を合わせるために変えている。表6ではその違いを述べている。

#### 10. 一つの単語が多様な言い回しになる

『そらいろのたね』と『The Blue Seeds』では日本語版では、「入ってきた」という言葉が英語版では全て入る動物の動作に合わせている。「ひよこがやってきました。どあをあけてはいました。ねこがきてはいました」が「When Chicken, who happened to be

passing by. And he hopped into it through the front door. And he crept into it through the front door.」になっており、普通に歩く、飛び跳ねながら入る、はいつくばって入ってくる様子を表し、英語の動詞が内包する意味の豊かさを感じるものである。

『はらぺこあおむし』と『The Very Hungry Caterpillar』では「ate through」を「たべました」と訳している。エリック・カールの本はフルーツに穴が開いていて、食べて突き抜けるようになった雰囲気が出て、まさしくthroughなのであるが、日本語では単に「たべました」となっている。これは穴の中に指を入れて虫がでてくるように演出をすることで、eat throughの意味を感じることができるだろうが、訳に一工夫欲しいところである。『はらぺこあおむし』は市民図書館で最も貸し出しの多いところもあり、小学校での「外国語活動」の授業でも利用される上位にある本である。微妙に使分けられた言葉の差も、絵本にあげられた穴という魅力的な要素によって補われているのである。

## 11. 対話形式か、語り口か

『オラたちのたけやぶ』と『The Bamboo Grove』では英語版では語り形式になっているが、日本語版では対話形式になっているところが基本的に異なる。これはもともとタイの話である。静かな村、その真ん中に茂る竹藪が、村の開発を行う現代の破壊産業に打ち勝つ話である。民族文化にあふれる絵本であるが、一般的な語り口の英語版と、主人公、オラの語る対話形式になっている日本語版での違いがある。7頁に、英文では「One day the old man told the children a story.」が挿入されており、日本語版では「8頁：どうぶつや とりや むしんこもじゃ。じゃから、わしらも もりや きを たいせつに せんと いかんのじゃよ。」という記述があるが、英語版ではない。

## 12. 遊びの名前・花の名前・判りにくいものを変える

『あおちゃんときいろちゃん』では遊びの名前が「Ring-a-Ring-O'Roses!」が「ひらいたひらいたなんのはなひらいた」になっている。歌は違うが、遊びは両方とも花の歌を歌いながら歩いて最後は座るといふ動きをとることで、よく似ている。それは日本の子どもにわかりやすくするためのものであろう。また、『あなはほるものおっこちるところ』と『A Hole Is To Dig』において、「Dood-ledoodledoo-oo」が「おっこりんのしゃーんしゃん」と訳されている。これも子どもに直接語りかける絵本であるからこそ、その国の子どもが知っている遊びに変換する必要があったと思われる。

また、『フレデリック』では原作のperiwinkles（つるにちにちそう）を日本語版では朝顔に変えているが、子どもにわかりにくいものを、子どもなら誰でも知っている朝顔にしている。『スイミー』で原作にあるメドウサの名

前を日本語の訳本ではカットしている。ギリシャ神話のゴルゴン三姉妹の末娘の名で、蛇の頭髪を持ち、これを見るものを石に化したという話を日本の子どもはおそらく知らないからである。

## 13. スペース上の省略

『白雪姫』と『Snow White』では、ページ数を合わせ、1頁に文章を収めるために、適宜省略されている。例えば7頁の「Snow White began to run-over sharp stones and through thickers of thorns. Wild animal leapt out at her but they did her no harm.」が訳本ではすっぱり抜けている。このような箇所は他に8箇所に入る。絵本の機能を果たすためには、原作のもつ「絵本の各部分と全体とは必然的な関係を保っている [5]」といい、「ページターナー」といって、絵本の頁の機能とその展開は、絵本をめくることによって物語を展開し、読者の目をひいていくために、めくるという欲求をおこさせるものをいう [6]。その意味で、訳者は見開きの頁を大切に考える。白雪姫の長い語りのカットはそのために行われたのであろう。

## 14. 表紙の絵の変更

『ルピナスさん』と『Miss Rumphius』において、英語の原本『Miss Rumphius』の本は紫色の枠で囲まれており、ルピナスの紫花の色をしている。サイズは縦×横が230mm×250mmである。内容は全てのページにわたって色は濃くなっている。しかし、日本語の訳本は全ページに渡って色は薄めであり、表紙の色は図5-2のように薄黄緑色が使われており、題にルピナスさんという言葉を使っているが、表紙にそれらしき花を配置していない。日本語の訳本『ルピナスさん』は 縦×横210mm×

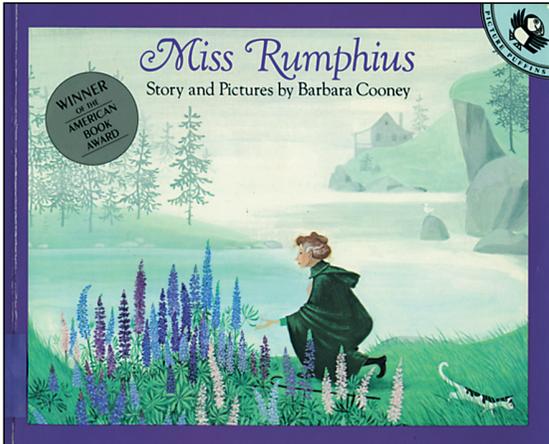


図 5-1 英語の原本『Miss Rumphius』表紙より引用



図 5-2 日本語の訳本『ルピナスさん』表紙より引用

264mmと横長になっている。このように極端に色もデザインも違う絵本は珍しい。出版社のほるぷ出版に問い合わせたところ、訳本を出す場合、国によって作者の方でデザインや色を変えることはありますという答えであった。

『スイミー』では英語版の見開きが図 6-1 のようになっている。しかし、日本語版では、図 6-2 のような絵になっている。これは小さな魚が集まって大きな魚の形になることで、大きな魚に対抗するというお話の意味を、最初にメッセージとして送るために変えたものと思われる。このことで、よく本の内容が理解できる。このように、「表紙と裏表紙の描き方を工夫し

てテキストに展開されるエピソードを暗示することもある [7] という。

### 15. 道徳的な意味合いの強調

『ぴかくんめをまわす』と『Pekka says go!』では日本語では23頁「しんごうのないときはおまわりさんのあいずをしっかりとまもりましょう」が入っている。しかし、訳本にはない。原作者はまた、最後の頁「ぴかくん、よかったね」が英語では「Good night, Pekka, goodnight.」と変わっている。

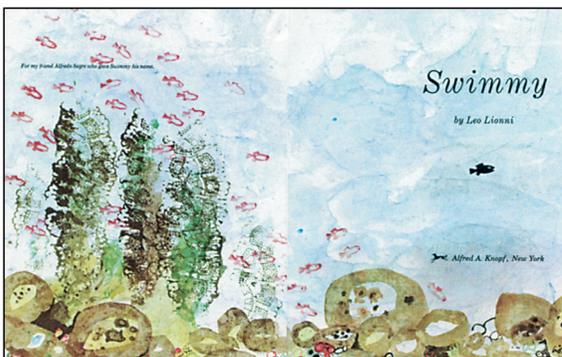


図 6-1 英語の原本『Swimmy』見開き表紙から引用



図 6-2 日本語の訳本『スイミー』見開き表紙から引用

表7 『葉っぱのフレディ』と『The Fall of Freddie the Leaf』に見られる「死」の言葉  
(下線は筆者が付ける)

頁	葉っぱのフレディ	The Fall of Freddie the Leaf
13	ひとり残らずここからいなくなるんだ	Some people call it <u>die</u> .
14	ぼくもここからいなくなるの	Will we all <u>die</u> ?
	だからひっこすのだよ	Then we <u>die</u> .
	ぼくはいやだ	I won't <u>die</u> !
15	ぼく <u>死ぬ</u> のがこわい	I'm afraid to <u>die</u> .
	<u>死ぬ</u> ということも変わる一つののだよ	Why should you be afraid of the season of <u>death</u> ?
16	この木も <u>死ぬ</u> の？	Does the tree <u>die</u> , too?
17	いつかは <u>死ぬ</u> さ	Someday.
	(訳なし)	Where will we go when we <u>die</u> ?
	葉っぱも <u>死ぬ</u> 木も <u>死ぬ</u>	(原文なし)
	春に生まれて、冬に <u>死</u> んでしまうフレディの一生にはどういう意味があるののでしょうか？	“Then what has been the reason for all of this?” Freddie continued to question. “Why were we here at all if we only have to fall and <u>die</u> ?”

### 16. 死に対する考え方の影響

『葉っぱのフレディ』と『The Fall of Freddie the Leaf』は日本でもよく読まれた本である。日本語版では各頁に一枚葉っぱの絵を描いて、原作の写真を、それより小さくしてきれいにしている。これは死を明るく伝えようとしている日本の子どもに対する配慮ではないかと思われる。生きることを明るく伝えたいという訳者の意図が感じられる。182×234mmと210×184mmと言う風にサイズも日本の場合が大きくなって柔らかくきれいになっている。「死」の言葉の数の差は日本語では7箇所6文章、英語の「dieとdeath」は9箇所9文章、である。英語の「dieとdeath」を「いなくなる・引越す・いやだ」と言い換えて、直接死ぬという言葉

を避けている。これは死に対する宗教観の違いに基づいた、子どもへの配慮が働いたと考える。

### 17. 絵も文章もほぼ一致

原本も訳本も同じであったのは64組中9冊(14%)あった。この割合は翻訳本としては低いと感じられる。表8に原本と訳本を示している。内容的にはシンプルなものが多い。『おじいさんの旅』は3代にわたる家族の歴史を絵本にしたものであり、家族のつながりを示す。『できるかな？頭からつま先まで』は、体を動かすことを促す絵本であるので、わかりやすい。『ごきげんなライオン』や『どろんこハリー』は冒険ものであるが、非常に軽快な筋立てである。

表8 訳本が日英同じもの

16-1	おじいさんの旅 1993	Grandfather's Journey 1993
16-2	できるかな？頭からつま先まで 1997	From Head to Toe 1997
16-3	ぼく、お月さまとはなしたよ 1985	Happy birthday, Moon 1982
16-4	ごきげんなライオン 1964	The happy Lion 1954
16-5	どろんこハリー 2004	Harry the Dirty Dog 1956
16-6	ピーターのいす 1969	Peter's Chair 1967
16-7	あまがさ 1958	Umbrella 1999
16-8	くまのコールテンくん 1976	Corduroy 1968
16-9	ものいうほね 1978	The Amazing Bone 1976

#### IV 絵本の翻訳に何が影響しているか

##### 1. 絵本の心を伝える手法として

藤本は翻訳のおもしろさと難しさについて次のように述べている。「よその国で出された絵本は、もともと内容が自然・風土から文化・習慣、また細々した衣食住にいたるまで違うわけですから、日本で出版する際は、横文字を日本語に直すだけでは日本の読者、特に子どもの読者にはわかりにくいことがあります。さらに、小説などと違って、絵本には絵がありますから、時には文章で語っていることをすでに絵が示している場合、逆に文章に書いていないことを絵で示している場合もあり、さまざまな工夫をして、言葉を移し変えなければならない [8]」といいます。本研究においてはそのさまざまな工夫を見る資料を得ることができた。子どもたちに絵本のもつ意味をより深く理解してもらうために取り入れられているのは、題を変える・副題を挿入したりする本が多かったが、題は本の方向を教える重要なものである。また、人が手にとって読んでみようとする道しるべでもある。ここに意味を持たせることは大変重要であり、翻訳者にとっては物語全てを含んだ絵本の命ともいえるものであろう。したがって訳者が様々なところに現れる。それはタイトルに留ま

らず、表紙をめくった次の頁の扉にかかれたスイミーの絵であり、ルピナスさんの表紙の色やデザインである。絵本はその頁、頁で心を集中させて自分の中で話を展開するものである。したがって、話の展開をミステリアスにして読者を引っ張る場合もあるが、タイトルで内容を示してもその興味を減退させるどころか、興味を刺激する方向に働き、決して妨げにはならない。

また、状況を多く語らねばならないのは、その国の習慣で、直感的に判るものと判らないものがあること、その国の人がもつイメージが違うので、文章を入れたり、抜いたり作業が必要になってくることはうなずける。加筆している典型的な2例を前述したが、「翻訳はある意味は翻訳のラインと同時に創作のラインもある。・・・また、原作を翻訳時の時代や文化に合わせる翻訳の二重性がある [9]」と、神宮が児童文学者の梨木との対談で述べている。訳者が誰でどのような人であるかは大きな問題ではある。しかし、誰であれ、最初に述べたように、一冊の絵本を多くの人が訳することは少ないので、訳者の感性を信じる他はないのであるが、そこには、普遍的な翻訳の二重性が存在することを見出すことができた。

子ども観による違いもあった。本調査で見ら

れたのは道徳的な意味合いの強調と死に対する考え方の影響であった。お話をそれ自体の楽しみで終わらず、教育的な一文を入れている。昔から日本は絵本を通して教育的メッセージを送り続けてきた。正直爺さんは必ず、最後には大判小判がザックザクと出てきて、欲張りばあさんはお化けやガラクタに見舞われるのである。正直であれば必ず金持ちになり、それが良しという価値観に一本化していた。その名残を見る思いがあったが、絵本にまでこのようなことは必要なのだろうかという疑問が残る。

死の場面を子どもの目から覆い隠してしまった日本では、現在も家庭で命の終焉を迎える人は少なく、子どもたちから遠いところで扱ってきた。そのことも、訳本に表れている。日本では絵本は最近でこそ心の栄養としての意味が強調されるようになったが、知的な刺激教材としての意味合いも深まり、別の意味で日本的な子ども観による翻訳となっていることは否めない。「子どもの本は、書き手と読み手の立場に違いがあることが特徴である。書き手である大人は、自分たちが別れをつげた「過去」の子ども時代に関心を寄せているのに対し、読み手である子どもたちは、自分たちの『未来』の成長に関心を寄せている。こうした特長のために、子どもの本を研究する際に、教育的観点を重視するものと、文学作品としてテキストの解釈を重視するもの、二つの立場が生じる [10]」と英米児童文学および翻訳を行っている田中美保子という。ここでも、翻訳における二重性を見ることができる。

日本語圏と英語圏の違いで変えたほうが良いこともあった。また、人名・地名の違い、遊びの名前を変える、文字の違いによるものについては国が変われば変えざるを得ないものである。しかし、その変え方は知られていない土地名は削られ、よく知られている地名は入れられ

るというように、地名そのもののもつイメージが作品にとって多くの意味を持つことがわかる。私たちはことば一つに持たせたイメージで一瞬にして共感することができる。子どもたちにとって、また、人名については、特別なものでないものは、子どもがそのお話にすぐ入っていけるためには聞きなれない外国の名前より、親近感のある自国の名前であることが好ましい。遊びについてはどの国の子どもも似たような遊びがあり、それに近いものをもってくることが子どもにお話のイメージを伝え易いのである。

読者のすることは絵本を通じて書かれた世界とコミュニケーションをするだけでなく、「幼い子どもたちが、言葉のうえでの絵本間のつながりだけでなく、絵のうえでの絵本間のつながりをも認識することができる。・・・絵が枠組みを与えてくれる。子どもたちはその枠組みに基づいて法則を作り、自分の立てた仮説の真偽を試す [11]」のである。子どもたちの中でも、無意識のうちに二重性、もしかしたら多重性を実行していることがわかる。

絵本は絵と文章をあわせて物語るものと言われている。「現代絵本は絵に多くを語らせる。絵は単なる物語の絵解きではなく、それ自体自立した視覚情報になっており、絵そのものに象徴的な意味を託すのがポストモダンの絵本作家の特徴です [12]」という谷本も視覚的な情報に翻訳も配慮しているという。彼はその著『子どもはどのように絵本をよむのか』の中で、「絵を読むことに天才的であるともいえる子どもたちは、同時に作品を読む姿勢がきわめて主体的であるのも特徴的です。例えば、絵本を読む子どもたちは絵本の世界から自由に入り出して、連想のおもむくままに自分の生活に結びつけた発話を繰り返します [13]」というように、一つの刺激としての絵本を想定すれば、視

覚情報は大きな刺激であり、子どもの連想を書き立てるためには、その国の文化に即した書き換えが必要であろう。

今回の調査では絵本の全体イメージをタイトルで変えた本が多いことを見出したが、表紙のデザインの翻訳がいかにかに難しいかを前掲書1で青山南と羽島一希が対談で述べているが、特に文字の形や配置は言葉の違いで扱いに工夫が必要であるという。藤本朝巳は『絵本はいかにかに描かれるか』の中で「絵本が楽しい、おもしろいという理由の一つに、色の用い方があります [14]」と言い、色はそのもののもつイメージがある。『ルピナスさん』と『Miss Rumphius』において「ルピナスさん」というこの話の命題がこのタイトルになっている。江國はエッセイの中で、原著が『ミス・ランフィス』ということに、老いや孤独をきちんと引き受けた上で自由に生きた一人の女性と、彼女が誇りをもって選んだ人生とかがすっきり感じられるタイトル [15] と述べている。日本語版では彼女の人生で欠かすことのできない花の名前を盛り込んだルピナスをタイトルにもってきているので、物語のテーマをはっきりとさせている。しかし、すっきりときっぱりとした人生を象徴する色が原著の紫と黄緑という違いは色の好みの国民性であろうか。英語版の色の鮮やかさに驚いた人は多い。『ルピナスさん』は本の中の一枚一枚も日英で濃さが違って、国民性をあらわしている。

しかし、アーノルド・ローベルの、かえるとガマが主人公の二人ものはまったく同じ色調である。これは、江國は「軽やかで淡々とした物語」であり、押さえた色調といい平明な訳文といい、本当にやさしい本だ [16]」というように、この本のやさしさはそのまま日本語版に採用されていて、原作の味を伝えている。ユング派分析家ファースの絵画療法の手引きによれ

ば、「あわい黄緑は心理的ないし身体的な弱さ。治療援助をうけながら、生命が消えていくこと、あるいはよみがえること。紫は、自分のものにしたい、コントロールしたいという欲求や、他人にコントロールをと支持を求める気持ちを表しているかもしれない。思い責任を暗示したり、背負うべき十字架があることを示唆している可能性もある [17]」という。訳者が色の深層解釈を意識していたかどうかはわからないが、結果的には内容も含めて国民性を表しているのではないかと思われる。

絵本画家である赤羽は『私の絵本ろん』の中で、長く住んでいた中国では「あの乾いた風土のなかでは、原色の赤や藍の一色がよく似合う。和服にあるような中間色などは、この風土の中ではけし飛んでしまう。日本の風土は、湿気を含んでソフトである。なればこそ、あの中間色が生まれ、よく似合う [18]」という。さらにその湿度故に日本の緑は多く、文化にも緑は欠かせない、「緑と日本人の一体化 [19]」がもたらした色の使い方なのであろうか。

## 2. 声の文化として

絵本はあくまで、声の文化である。したがって、心地よいリズムの伝達は重要である。「日本語は、擬音語・擬態語がとても多い国である。一方、英語の擬音語・擬態語は日本語の3割にも満たないと言われている [20]。特に幼い子どもの世界ではオノマトペは日常会話や身体表現にも多く使われており、古市は幼児教育でオノマトペの使用の有効性を身体表現で証明した [21]。子ども自身も自発的に自分の気持ちを強く訴えたいとき、何かをイメージして、何かになったつもりするとき、慣用句や伝承遊びのときなどに使う。皆島は「日英語のオノマトペについて対照言語学的考察を行なった結果、日本語には枚挙に暇がないほど、オノマトペを使った

表現が豊富である。しかし、日本語から英語への翻訳という観点から見ると、例を挙げながら、必ずしも日本語のオノマトペが英語においてもオノマトペによって表現されているとは限らない [22] という。彼は286例の文章を分析して、英語でもオノマトペを用いた表現に翻訳されることもあるが、表9に示すような分析を行っている。

**表9 擬態語に対応する英語の表現形式  
皆島 [22] より筆者らがタイトルを再構成**

動詞を用いた表現	25.9%
副詞を用いた表現	20.6%
形容詞を用いた表現	17.5%
名詞を用いた表現	10.8%
擬態語を用いた表現	1.4%
その他の表現	6.6%
訳出なし	17.1%
合計	100%

上記の表の結果から、日本語のオノマトペ全般の英語への翻訳という観点から見ると、少なくとも以下の3点の傾向性を指摘している。(A) 日本語のオノマトペの英語への翻訳においては、動詞をはじめとして、副詞、形容詞、名詞などで表現されるケースがほとんどである。(B) 日本語のオノマトペの英語への翻訳においては、英語でもオノマトペで表現することは少ない。(C) 日本語のオノマトペの英語への翻訳においては、訳出していないケースは決して少なくはない。

日本語がオノマトペというすぐれた感覚的な表現を多用するのに対し、英語では一般動詞や副詞で表現することがほとんどである、という従来から指摘されてきたことの再検証ができたと思われる。この皆島の論証は、本研究におい

ても見る事ができた。「一般動詞とはいってもこれらの動詞は語源的にはほとんどがオノマトペに由来するものである。しかも、英語の場合は概念化が強いので、特に非母国語話者の語感では、オノマトペであるということを感じかせにくくしているのであろう [23]」という。煤垣の指摘がある。

表現形式を変えたために変わるものもあった。対話形式か、語り口かで変わる、言葉のリズムを大切に詩的な本などは訳者の心の表れである。本は文字の文化であるが、「絵本は本質的には声の文化にふくまれるものである [24]」。声の文化と子どもの本の関係について絵本を数多く世に送り出してきた松居は、その著『声の文化と子どもの本』で、絵本を言葉で伝承する大切さを述べている。それは翻訳をするという本の意味を伝えると共に、伝承の意味を重要視するためには変える必要があるからであろう。

童話詩の翻訳については1900年の前半から多くの作家が詩のリズムや形態の翻訳には苦労しており、原の著『比較児童文学論』では日本における翻訳・受容の章の中で、いい翻訳の例を挙げて説明している [25]。絵本においては子どもに受け入れられやすくするために、言葉のリズム性を優先させることが十分考えられる。また、そのことは、韻を踏んだ絵本の翻訳も十分そのことを意識しつつ行っていたことから、十分配慮して行われていることがわかる。

## まとめ

絵本そのものがもつ多層構造 [26] を翻訳する場合、本調査では3つの二重性を引き出すことができた。それらは①国の違い、②時代の違い、③翻訳と創作という翻訳者における違いである。そこに絵本を読む手法としての工夫、声の文化としての価値が加わる。それは、国によ

る子ども観、生活習慣、文字の違い等の断片性 [27] もいりこんでくる。しかし、基本的に翻訳に耐え、国や年齢を超えて愛されるものは絵本に流れる心である。それは技術ではなく、人の生き方や心を大事にする人の問題であることが判った。特に「やさしさ」は各国に共通するものであり、『ぐりとぐら』が9つの国で翻訳され、愛された例を挙げて子どもの生活には欠かせない絵本としてあげている [28]。エリック・カールの絵本では、独特の仕掛けがあり、自分の娘への愛や、おばあちゃんの思い出から書かれており [29]、国を超えて愛される要素を持っている。それは翻訳を超えて、人の心に響く何かを秘めているからである。

本研究は英語の絵本と日本語の絵本を取り扱ったが、絵本の持つ意味と国の違いによる習慣で変えざるを得ないものもあったが、大半は子どもに対する愛情にあふれた訳者や編集者の意図が汲み取れた。このことを通して、絵本は時代の流れにより、その価値観も変えていくであろう事を感じた。訳された絵本を読む私たちもまた、絵本を心で訳するという作業を担っていることも強く感じた。さらに、絵本を通して、主体的に自分で世界を作り上げて心の世界を旅する子どもの存在を考えると、単なる絵本に接することだけでなく、多くの体験を通じて人間を理解する機会を作る必要があることも、行間から読み取ることができた。

今後、多くの絵本に接することにより、多重構造の絵本の構造と翻訳の二重性の関係を明らかにしていきたい。

## 謝辞

この研究をするにあたり、愛知東邦大学附属図書館、近江八幡市立図書館より、英語と日本語の絵本の入手において、多大なお力添えを頂き、ここに感謝を申し上げます。

## 追記

「ブレーメンの音楽隊」の訳本で、この研究の動機付けになった理由については明らかにすることが出来なかったが、これからの研究の道しるべにして今後も研究を続けて生きたいと思う。

## 引用および参考文献

	日本語の絵本	英語の絵本
1	アーノルド・ローベル作・三木卓訳 『ふたりはいつしょ』 文化出版局, 1972.	Arnold Lobel “Frog and Toad Together” Harper Collins Publishers, 1971.
2	アーノルド・ローベル作・三木卓訳 『ふたりはいつも』 文化出版局, 1977.	Arnold Lobel “Frog and Toad all year” Harper Collins Publishers, 1976.
3	アーノルド・ローベル作・三木卓訳 『ふたりはきょうも』 文化出版局, 1980.	Arnold Lobel “Days with Frog and Toad ” Harper Collins Publishers, 1979.
4	アーノルド・ローベル作・三木卓訳 『ふたりはともだち』 文化出版局, 1987.	Arnold Lobel “Frog and Toad are Friends” Harper Collins Publishers, 1971.
5	アレン・セイ作 『おじいさんの旅』ほるぷ出版, 2002.	Allen Say “Grandfather’s journey” Houghton Mifflin Company, 1993.
6	アンスン・マギー文・ピーター・レイノルズ絵・なかがわち ひろ訳 『ちいさいあなたへ』 主婦の友, 2008.	Alison McGhee “Someday” ATHENEUM BOOKS FOR YOUNG READERS, 2007.
7	エズラ・ジャック=キーツ作・きじまはじめ訳 『ゆきのひ』 偕成社, 1969.	Ezra Jack Keats “The Snow Day” Caldecott Award Book, 1962.
8	H.A.レイ作・光吉夏弥訳 『ひとまねこざるときいろいろ ぼうし』 岩波書店, 1941.	H.A.Rey “Curious George” Houghton Mifflin Company, 1941.
9	ウイリアム・スタイグ作・せたていじ訳 『ものいうほね』 評論社, 1976.	William Steig “The Amazing Bone” Farrar・Straus and Giroux: New York, 1978.
10	エリック・カール・<どうな>おこ訳 『できるかな?あたまか らつまさきまで』 偕成社, 1997.	Eric Carle “From Head to Toe” Harper Collins Publishers, 1997.
11	エリック・カール・もりひさし訳 『パパ、お月さまとって!』 偕成社, 2006.	Eric Carle “Papa, please get the moon for me” Shimon & Schuster, 1986.
12	エリック・カール・もりひさし訳 『はらぺこあおむし』 偕成社, 1976.	Eric Carle “The Very Hungry Caterpillar” Phillomel Books, 1987.
13	おおむらゆりこ文・なかがわえりこ絵 『そらいろのたね』 福音館書店, 1964.	Yuriko Nakagawa・Rieko Nakagawa “The Blue Seed” Fukuinkan Shoten, 1991.
14	ガス・ウイリアムズ作・まつおかきょうこ訳 『しろいうさ ぎとくろいうさぎ』 福音館書店, 1965.	Garth Williams “The Rabbits’ Wedding” Harper & Row, Publishers, 1968.
15	岸田衿子文・中谷千代子絵 『かばくん』 福音館書 店, 1962.	Eriko Kishida・Chiyoko Nakatani “Wake Up, Hippo!” Fukuinkan Shoten, 1991.
16	クラウス文・センダック絵 わたなべしげお訳 『あなは ほるものおっこちるもの』 岩波書店, 1952.	Ruth Krauss, Maurice Sendak “A Hole Is To Dig”, Harper & Row, Publishers, 1952.

	日本語の絵本	英語の絵本
17	ジーン・ジオン文・マーガレット・ブロイ・グレアム絵・わたなべしげお訳 『どろんこハリー』 福音館書店, 2004.	Gene Zion・Margaret Bloy Graham “Harry the Dirty Dog” Harper Collins Publishers, 1956.
18	シェル・シルベスタイン作・本田錦一郎訳 『おおきな木』 篠崎書林, 1976.	Shel Silverstein “The Giving Tree” Harper & Row, Publishers, 1964.
19	シャーロット・ブロットフ文、モーリス・センダック絵、小玉知子訳 『うさぎさんてつだってほしいの』 富山房, 1974.	Charlotte Zolotow・Maurice Sendak “Mr. Rabbit and the Lovely Present” Harper & Row, Publishers, 1962.
20	E. ジャック＝キーツ作・きじまはじめ訳 『ピーターのいす』 偕成社, 1969.	Ezra Jack Keats “Peter’s chair” Viking, 1967.
21	ジョン・シェスカ文・レイン・スミス絵・いくしまさちこ訳 『三びきのコブタのほんとうの話』 岩波書店, 1991.	Jon Scieszka・Lane Smith “The True Story of the 3 Little Pigs!” Puffin Books, 1989.
22	ジョン・バーニンガム作・谷川俊太郎訳 『ALDO わただけのひみつのともだち』ほるぷ出版, 1991.	John Burningham “ALDO” Jonathan Cape London, 1991.
23	ジョン・バーニンガム作・きじまはじめ訳 『BORKA ボルカ』 ほるぷ出版, 1993.	John Burningham “BORKA” Jonathan Cape London Cape, 1963.
24	シリマラ・スワンポキン作・プリプレム・プリアンパムレン絵・浜田千草訳 『オラたちのたけやぶ』 新世研, 2003.	Silimala Suwannapokin・Preeprem Plienbamarunge “The Bamboo Grove” Shinseken, 2002.
25	ドン＝フリーマン・まつおかきょうこ訳 『くまのコールテンくん』 偕成社, 1975.	Don Freeman “Corduroy” The Viking Press, 1968.
26	筒井頼子文・林明子絵 『いもうとのにゅういん』 福音館書店, 1983.	Yoriko Tsutsui・Akiko Hayashi “Anna’s Special Present” Fukuinkan Shoten, 1991.
27	筒井頼子文・林明子絵 『とんことり』 福音館書店, 1986.	Yoko Tsutsui・Akiko Hayashi “Anna’s Secret Friend” Fukuinkan Shoten, 1987.
28	ドクター・スース・いとうひろみ訳 『キャット イン ザ ハット』 河出書房新社, 2000.	Dr. Seuss “The Cat in the Hat” Random House, 1957.
29	トミーアンゲラー作・今江祥智訳 『すてきな三にんぐみ』 偕成社, 1969.	Tomi Ungerer “The Three Robbers” ATHENENM, 1962
30	中川季枝子文・大村百合子絵 『ぐりとぐら』 福音館書店, 1967.	Rieko Nakagawa・Yuriko Omura “Guri and Gura The Giannt Egg” Tutttles for kids, 2002.
31	なかのひろたか文・なかのまさたか絵 『ぞうくんのさんぽ』 福音館書店, 1977.	Hiroataka Nakano “Elephant Blue” Fukuinkan Shoten, 1968.
32	西内ミナミ文・堀内誠一絵 『ぐるんぱのようちえん』 福音館書店, 1966.	Minami Nishiuchi・Seiichi Horiuchi “The Happiest Elephant” Fukuinkan Shoten, 1991.

	日本語の絵本	英語の絵本
33	バージニア・リーバートン作・石井桃子訳 『ちいさいおうち』 岩波書店, 1965.	Virginia lee Burton “The Little House” Houghton Mifflin Company・Boston
34	エドワード・ディーゾーニ・せたていじ訳 『チムとゆうかんなせんちょうさん』 福音館書店, 2001.	Edward Ardizzone “Little Tim and The Brave Sea Captain” Frances Lincoln Children’s Book, 1936.
35	バーナデット絵・ささきたつこ訳 『白雪姫』 西村書店, 2005.	Bernadette Watts “Snow White” North-South Books, 1683.
36	バーバラ・クーニー作・かけがわやすこ訳 『ルピナスさん』 ほるぷ社, 1987.	Barbara Cooney “ Miss Rumphius” Puffin Books, 1982.
37	パット＝ハッチンス作・わたなべしげお訳 『ロージーのさんぽ』 偕成社, 1975.	Pat Hutchins “Rosie’s Walk” Aladdin Paperbacks, 1968.
38	ビル・マーチン文・エリック・カール絵・偕成社編集部訳 『くまさんくまさんなにみてるの?』 偕成社, 1967.	Bill Martin, Eric Carl “Brown Bear Brown Bear, What Do You See?” Holt, Rinehard and Winston, 1983.
39	フランク・アッシュ作・山口文生訳 『ぼく、お月さまとはなしたよ』 評論社, 1985.	Frank Asch “Happy birthday Moon” Prentice-Hall, 1982.
40	ヘルメ・ハイネ作・いけだかよこ訳 『ともだち』 ほるぷ出版, 1996.	Helme Heine “Friends” Getraud Middelhuve Verlag, 1982.
41	ポール・ガルドン作・ただひろみ訳 『しょうがパンぼうや』 ほるぷ出版, 1976.	Paul Galdone “The Gingerbread Boy” Clarion Books, 1975.
42	ホン・ソンチャン作・梅沢絵代子訳 『なかよしむら』 新世研, 2001.	Seong-Chan Hong・M. Owaki & S.Ballard “The Village Where Everyone Is Happy” Shinseken, 1999.
43	マーガレット・ワイズ・ブラウン作・クレメン・ハード絵・せたていじ訳 『おやすみなさいおつきさま』 評論社, 1979.	Margaret Wise Brown, Clement Hurd “Goodnight Moon” Harper Collins Publishers, 1947.
44	マーティン・ワッデル文・バーバラ・ファース絵・角野栄子訳 『ねむれないの?ちいまくん』 評論社, 1991.	Martin Waddell・Barbara Firth “Can’t You Sleep, Little Bear?” Walker Books, 1988.
45	松居直再話・赤羽末吉画 『だいくとおにろく』 福音館書店, 1962.	Tadashi Matui・Suekichi Akabane “Oniroku and the Carpennter” Fukuinkan Shoten, 1991.
46	松井直文・長新太絵 『ぴかくんめをまわす』 福音館書店, 1966.	Tadashi Matui・Shinta Cho “Pekka saya go!” Fukuinkan Shoten, 1991.
47	マックロスキー作・石井桃子訳 『海へのあさ』 岩波書店, 1978.	Robert McCloskey “One Morning in Maine” Viking, 1952.
48	松野正子文・瀬川康男絵 『ふしぎなたけのこ』 福音館書店, 1963.	Masako Matuno・Yasuo Segawa “Taro and the amazing bannboo shoot” Fukuinkan Shoten, 1991.

	日本語の絵本	英語の絵本
49	モーリス・センダック作・じんぐうてるお訳 『かいじゅうたちのいるところ』 富山房, 1975	Maurice Sendak "Where The Wild Things Are" Harper Collins Publishers, 1963.
50	モーリス・センダック作・じんぐうてるお訳 『チキンスープ・ライスいり』 富山房, 1986	Maurice Sendak "Chicken Soup With Rice" Harper Collins Publishers, 1963.
51	やしまたろう作 『あまがさ』 福音館書店, 1957.	Taro Yashima "Umbrella" Viking, 1999.
52	やしまたろう作 『からすたろう』 偕成社, 1979.	Taro Yashima "Crow Boy" Viking, 1955.
53	ユリー・シュルヴィッツ作・瀬田貞二訳 『よあけ』 福音館書店, 1977.	Uri Shulevitz "Dawn" Harper Collins Canada Ltd. 1974.
54	ヨーレン詩・ショーエンヘル絵・くどうなおこ訳 『月夜ののみみずく』 偕成社, 1989.	Jane Yolen・John Schoenherr "Owl Moon" Philomel, 1987.
55	ラッセル・ホーバン文・ガース・ウイリアムズ絵・まつおかきょうこ訳 『おやすみなさいフランシス』 福音館書店, 1966.	Russell Hoban・Garth Williams "Bedtime for Frances" Harper Collins Publishers, 1960.
56	ルイーゼ・ファティオ文・ロジャー・デュポアザン絵・むらおかはなこ訳 『ごきげんならいおん』 福音館書店, 1964.	Louise Fatio・Roger Duvoisin "The Happy Lion" Alfred A. Knopf, New York, 1954.
57	ルドウィヒ・ベメルマンズ作画・瀬田貞二訳 『げんきなマドレーヌ』 福音館書店, 1972.	Ludwig Bemelmans "Madeline" The Viking Press, 1967.
58	レオ＝バスカーリア文・島田光雄絵・みらいなな訳 『葉っぱのフレディーいのちの旅ー』 童話屋, 2008.	Leo Buscaglia, Ph.D. "The Fall of Freddie the Leaf A story of life for All Ages" SLACK Incorporated, 1982.
59	レオ＝レオニ文絵 谷川俊太郎訳 『あいうえおのき』 好学社, 1975.	Leo Lionni "The Alphabet Tree" Dragonfly-Books, 1968.
60	レオ・レオニ文絵・藤田圭雄訳 『あおくとときいろちゃん』 至光社, 1967.	Leo Lionni "little blue and little yellow" Aster Book, 1959.
61	レオ・レオニ作・谷川俊太郎訳 『じぶんだけのいろ』 好学社, 1978.	Leo Lionni "A color of his own" Alfred A.Knopf, New York, 1975.
62	レオ・レオニ作・谷川俊太郎訳 『スイミー』 好学社, 1969.	Leo Lionni "Swimmy" Alfred A. Knopf, New York, 1963.
63	レオ＝レオニ作・谷川俊太郎訳 『フレデリック』 好学社, 1969.	Leo Lionni "Frederick" Alfred A. Knopf, New York, 1967.
64	ワンダ・ガアグ文絵・いしいももこ訳 『100万匹のねこ』 福音館書店, 1961.	Wanda Gag "Millions of Cats" Picture Puffin Books, 1928.

## 引用文献

- [1] 神宮輝夫他（1997）「翻訳って何」『季刊ばるる』
- [2] 九頭美一士（2003）『ことばの海へ』南雲堂
- [3] 長田弘（1998）『子どもの本の森へ』岩波書店、134-135.
- [4] 藤本朝巳（2007）『絵本のしくみを考える』日本エディタースクール出版部、12.
- [5] 前掲書 [4]、20.
- [6] 前掲書 [4]、96.
- [7] 前掲書 [4]、181.
- [8] 前掲書 [4]、20-22.
- [9] 前掲書 [1]、22.
- [10] 田中美佐子（2002）（ヴィクター・ワトソン&モラグ・スタイル編 谷本誠剛）『子どもはどのように絵本を読むのか』356.
- [11] ヴィクター・ワトソン&モラグ・スタイル編 谷本誠剛訳（2002）『子どもはどのように絵本を読むのか』210.
- [12] 前掲書 [11]、14.
- [13] 前掲書 [11]、15.
- [14] 藤本朝巳（1999）『絵本はいかに描かれるか』日本エディタースクール出版部、48.
- [15] 江國香織（1990）『絵本を抱えてへやのすみへ』新潮文庫、39.
- [16] 前掲書 [15]、52.
- [17] グレッグ・M・ファース著、角野義宏・老松克博訳（2001）『絵が語る秘密』日本評論社、106-107.
- [18] 赤羽末吉（2005）『私の絵ろん』平凡社、23.
- [19] 前掲書 [18]、19.
- [20] 後路好章（2005）『絵本から擬音語・擬態語ぶちぶちぼーん』アリス館、11.
- [21] 古市久子（1995）「オノマトペ刺激が幼児の身体表現に与える影響について」『京都体育学研究』10、25-34.
- [22] 皆島博（2004）「日英語のオノマトペ」『福井大学教育地域科学部紀要（人文科学・外国語・外国文学編）』60、96-115.
- [23] 楳垣実（1961）『日英比較語学入門』大修館書店.
- [24] 松居直（2007）『声の文化と子どもの本』日本キリスト教団出版局、10.
- [25] 原昌（1991）『比較児童文学論』大日本図書、113.
- [26] 前掲書 [10]、78.
- [27] 前掲書 [10]、80.
- [28] 福音館書店編集部編（2001）『絵本「ぐりとぐら」のすべて』福音館書店、116.
- [29] 人気作家30人へのインタビュー（2000）『世界でいちばん愛される絵本たち』白泉社、27.

受理日 平成21年3月31日

